

「自然」を壁に塗り込む

report

融通無碍につくり出す「土の風景」—左官 挾土秀平—

水を引くように土を塗り、
詩を書くように壁をつくる

土、砂、ワラ、水といった身近な素材で、土地の気候風土に合った居住空間を造りあげてきた日本の左官職人—その伝統を踏まえながらも、独創的な仕事ぶりが注目されている挾土秀平氏。構想を練り、デザインを考え、土の配合を工夫し、コンセプトに沿った壁を塗り上げる。岐阜県高山市の仕事場では、15人の職人を率いる親方として、企業のカレンダー撮影に使う「土壁」のオブジェを制作中だった。本来、壁材としての土は不安定な存在であり「土を塗るのは水を塗っているのと同じ」と挾土氏は言う。水分の配合や天候で蒸発の度合いが異なり、塗るスピードにより仕上がり具合が変わってしまうのだ。

「塗ってから最低3、4日経たないと壁の表情は分かりません。その間、水が仕事をされていて、乾きが早過ぎるとひび割れるし、遅いと表情が悪くなったりするから」

言ってみれば、左官とモノの間には「自然」という《偶然性》が介在する。それだけにこの仕事は失敗といつも隣り合わせだ。

「10回のうち3回は大失敗する懸念があるけれど、



左官技能士、挾土秀平氏。1962年、岐阜県高山市生まれ。2001年に独立して「職人社 秀平組」設立。天然の土と素材にこだわって、文化財修復からホテルや近代建築物、首相官邸の壁づくり、個展開催も含め、国内外で幅広い活動を展開している

「同じ緻密な仕事及要求される職人でも、大工は人間に近く、左官は自然に近い存在という違いがある」と挾土氏。15名の職人を率いる親方として現場で仕事を差配する



事務室の壁一面に掲示された土壁のサンプル。花鳥風月の自然をモチーフにしたものから現代アート風まで、多彩な表現力が発揮されている



土壁にさまざまな表情をつける左官道具だが「自然相手に型にはまったやり方は通用しない」と考える挟土氏にとって、さほどこだわりの対象ではない



秀平組が近年手がけた、高山市の和菓子屋に併設された土蔵の内部。古い土蔵がモダン空間に生まれ変わった



壁に見立てた木枠の上で試し塗りを繰り返す。砂やワラなどを混ぜた土の配合を調整し、ひび割れがでないか気を配りながら、色の落ち着き具合や塗り面のしまり具合をチェックする

残りの3回は神懸かったようにうまくいく。それがこの仕事。むしろプロなので間をとって無難に収めることもできるけど……」

依頼を受けたその地域の土を使うようにしている。建物に土地柄を反映させるためでもあるが、何よりそれが左官本来のあり方と心得ているからだ。

「その土地にあるものを使うのが一番自然。世界各地から持ってきた極彩色の土で壁を作ったら、かえって気持ち悪いと思う。天然の抽出物をいくら集めてものを作っても『自然』とはかけ離れていく」

結局、自分たちが自然にどれだけ寄り添うかが《人間にとっての自然》——と考える挟土氏にとって、これまで手がけてきた作品の多くは自然がモチーフ。「自然や人に触れて詩ができるように、自分にとって壁を造るのは詩を書くようなもの」という。

これまで本業以外に、土と触れ合うイベントやワークショップなどでも指導してきた。挟土氏自身、土を扱う技術は独学で身につけてきただけに「多くの人に土と接してほしい」との思いは強い。反面、ワークショップにありがちな誰にでもできるという安易な指導法には疑問を呈する。

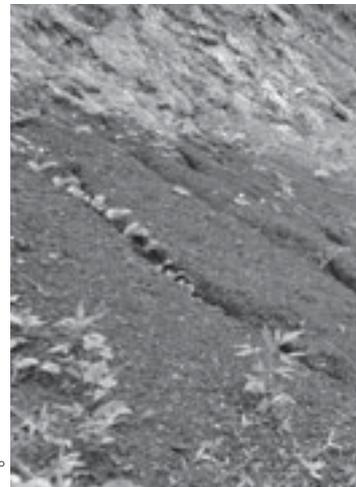
「土の感触を伝えるだけならいいけど、一般の人たちに土壁は簡単にできる」と誤解されるような内容なら問題。われわれがものづくりの体験をしてもらう場合は、何人もの職人がついてサポートするからこそうまくいく。最近のセルフビルドの風潮と職人技とは一線を画さないといいけない」

その言葉には、人間と自然を結ぶ「創作家」としての「土」への思いとともに、緻密で品格あるものづくりを担う左官職人の矜持が溢れていた。

(文責・CEL編集室)

CEL

地元、高山の郊外に所有する里山の敷地内に造ったかまど小屋。周囲の壁も赤土を見事に磨き上げている



飛騨高山の仕事場近くの採取場所でとれた赤土。付近の山林にはこうした場所がいくつもあるとい

挟土秀平(職人社 秀平組)
問い合わせ先

〒506-0802
岐阜県高山市松之木町1108-6
TEL:0577-37-6226
FAX:0577-37-6227
http://www.syuhei.jp/